

# 日常の靈化<sup>1</sup>

## —張壹淳とハンサリム運動を中心に—

著者：金在益（円光大学校宗教問題研究所）

翻訳者：崔多蔚（東北大学文学部）

### 【目次】

- I. はじめに
- II. 張壹淳の生命思想
  - 1. 民族の平和統一
  - 2. 自他が共に生きる道
  - 3. 飯は天（ハヌル）である
  - 4. 日常の靈化
- III. おわりに

### I. はじめに

无爲堂（ムウイダン）張壹淳（ジャン イルスン）先生（1928～1994、以下張壹淳）は原州で生まれ、学生時代を除けばずっと原州で一生を過ごした根っからの原州っ子である。彼は二十歳という若い歳にして、島山（ドサン）安昌浩（アン チャンホ）先生の精神を受け継ごうと原州大成高等学校を設立（1954年）し、2回も議員選に立候補（1956、1960年）した上、1961年の5・16軍事クーデター以降は公安事犯として追われ、苦しい牢獄生活を強いられている。70年代には民主化運動の影の主演として暗躍し、80年代以降には生命運動家として「ハンサリム」協同組合創立に力を注いだ。そして余生は市民運動家を業として過ごした。波乱万丈な一生であったが、常に低いところに留まり、无爲堂、一粟子の名を自身につけた。

金を稼げるような立派な職に就いたことのない張壹淳のことを、ある人はキリストと称し、ある人は歩く東学だと言い、ある人は無爲の生を生きたと評価した。張壹淳は当時市民運動家であった咸錫憲（ハム ソッコン）とは違い、生前に自身の思想を込めた体系的な文章を残さなかった。ただ、『无爲堂張壹淳の老子の話』（サムイン、2003）のような対談録

や『粟一粒』(チェ ソンヒョン、兜率、2004)、『米一粒の中の宇宙』(緑色評論社、初版 1997、改訂増補版 2009)、『汝に出会い、恥じらいを知った』(緑色評論社、2004)、『我は終ぞ知らざりき、汝が我なりけり』(シゴル生活、2010)等は当時の講演の録音記録や、各人の証言や逸話から綴ったもののみが残っている。以上から考えるに、彼の思想は常に生命に焦点が当てられていた。李泳禧(リ ヨンヒ)も張壹淳は「最初から生命思想に基づいており、現象的に時代状況に合わせた様々な形」としてそれが表現されたのだという<sup>2</sup>。

本論文は張壹淳の生命思想の大脈をなぞる目的のものである。張壹淳に対する生命と平和の議論は今まで断片的にしか議論されていない。張壹淳の生命思想が本格的に扱われ始めたのも、数年前に発表された田好根(ジョン ホグン)先生の「張壹淳の平和思想」<sup>3</sup>からである。この論文で田好根氏は張壹淳の生命思想の根幹は元曉(617~686、ウォンヒョ)の和諍思想と、義湘(625~702、ウィサン)の華嚴思想であるという。しかし、張壹淳思想に対する田好根氏の分析は通時間的な接近であった点が惜しい。彼の思想体系たりえる理論的根拠が乏しい状態で、彼の言説に表れる様々な思想的特質を拡大解釈できる余地もまた、十分呈され得る問題である。一方、張壹淳の生命思想に関する先行研究のうち注目すべき成果は趙晟桓(ジョ ソンファン)氏の研究である。

2018年11月東学農民革命(甲午農民戦争)原州秋季学術大会で発表された「无爲堂生命思想で繋がれた原州東学—崔時亨の『天地父母思想』と原州キャンプの『ハンサリム思想』を中心に—」<sup>4</sup>は、張壹淳と金芝河(キム ジハ)そして原州キャンプのハンサリム運動の思想的な根源を東学思想とし、思想的淵源を追跡した。東学について張壹淳は海月の東学をもって、金芝河は水雲の東学をもって解釈していることから、結局これらが融合され「ハンサリム宣言」にも溶け込んでいるという。ゆえに「ハンサリム運動」は新東学運動であるというのである。また『韓国近代の誕生—開化から開闢へ—』(モシヌンサラムドゥル、2018)<sup>5</sup>では、「韓国学としての東学」というテーマから「市民社会の東学」というタイトルで張壹淳の思想を捉えている。張壹淳の思想構造と一粒思想、不二思想、包み込む革命論に至るまで、張壹淳の生命思想に関する地平を拡張させた研究といえよう。しかし、この研究では張壹淳思想の変遷過程に対する言及が足りていない。

私はこのような問題の克服方法として、張壹淳の行跡を中心に彼の言説を比べながら理解する必要があると考える。延いてはこのような方向性が張壹淳の生命思想の研究をより広げられると期待している。無論このような側面における先行研究として金昭男(キム ソナム)氏の研究が先駆的である<sup>6</sup>。原州地域の協同組合運動をテーマとした膨大な資料と、

当時の人物たちを相手にインタビュー調査・研究を行っている。しかし、彼は協同組合の歴史的側面を中心に記述しているため、一人物の思想を理解するにおいては限界がある。本論文では、年代記的観点から張壹淳の生命思想が転換する起点を確認する。具体的な時期としては 1961 年中立化平和統一論を主張した時期と、1977 年に生命運動へと転換した起点の前後の思想的特質を見ていく。

## II. 張壹淳の生命思想

### 1. 民族の平和統一：1961 年まで

張壹淳先生は 1961 年 5・16 軍事クーデターが起きた二日後に投獄される。「我々は弱小民族であるが、米国であれソ連であれ外勢の影響と干渉を受けないためには中立化平和統一が必須である」<sup>7</sup>という主張が投獄のきっかけとなった。そして後の裁判において「被告人等が中立化平和統一論・米韓経済協定反対のいわゆる二大悪法反対等を宣伝したことにより、反国家団体である北朝鮮の傀儡に同調しその目的遂行のための行為を行った」という判決で八年刑が宣告された<sup>8</sup>。張壹淳がこのように重刑に処された理由は、彼が「民族自主統一中央協議会」の執行委員だったからである。民族自主統一中央協議会は 1961 年 2 月 25 日ソウル鍾路区慶雲洞天道教中央大教堂で民主・自由・自主を標榜する民間統一団体だった。ここには民族宗教、革新政党をはじめに、教職員労働組合および労働、学生等の勢力が加勢したが<sup>9</sup>、当時は 1960 年にあった 4.19 革命による第二共和国が出帆した時期であったため、革命の雰囲気はまだ漂っていた時代だった。さらに 1961 年の 2.8 米韓援助協定による自主的な雰囲気が高揚していた上、4 月 12 日 UN 政治委員会で韓国統一に関する決議書が可決され<sup>10</sup>、4.19 革命一周年も近く、祖国自主統一に対する熱望は一層高揚していた時期でもあった。このような状況で 1961 年 5 月 16 日の冷徹な朝が訪れる。5.16 クーデター勢力は民族自主統一中央協議会を率いた進歩主義政党、社会団体、メディア関係の人々を次々と拘束していった。そして彼らのほとんどは裁判で終身刑を宣告された<sup>11</sup>。

以上は彼が 33 歳の時のことである。しかし、彼は既に 20 代前半に世界連邦運動 (One-World Movement) に参加している。かの有名なアインシュタインとの二度に渡る書信交換を通じて「世界を一つの政府を樹立すべき」という志に賛同し、世界連邦運動韓国支部の常任理事として活動した<sup>12</sup>。このような彼の活動の裏側には「平和」への熱望があった。6.25

韓国戦争当時二度の死線を越え、彼は生と死の実存的問題を誰よりも実体的に体感していると思われる。そしてその対立と葛藤の絶えない連鎖は「非暴力抵抗運動（サティヤーグラハ）」によって絶つことができるという信仰をガンジー（Mohandas Karamchand Gandhi）とビノババーベ（Vinoba Bhave）から見出した<sup>13</sup>。それは以下の文に表れている。

この社会をどのようにして平和で自由なものにするかが大事です。そのためには各々が自分なりに普段から精進しなければなりません。自分に害を及ぼす人に対しても‘ああ、あの人はそういう人なんだ’くらいで受け止めはするものの、憎しみを抱いてはいけません。…（中略）…タイマンのボクシングのように接してはならないのです。<sup>14</sup>

多くの人は石や銃、刃物が最大の武器であると考えがちですが、そうではありません。ガンジーは空身でした。丸腰だったのです。それが最大の武器でした。持たざるがゆえに難癖のかけようもなかった。運動はガンジーのように何も持たずにやるのが良いのです。丸腰が最善なのです。掛け声すらも叫ばないほうが良い。人によっては掛け声もまた暴力に成り得るのです。完全な非暴力をなすべきです。<sup>15</sup>

このような背景のなか、張壹淳は同じ志を持つ人たちと共に中立化平和統一論を叫んだのであった。ここで中立化（neutralization）とは戦争を起こさず参加もしない、また戦争の支援すらしないといういわゆる中立を保った国際的地位のことである。ゆえにひたすら自衛にのみ措置が取れるだけであり、中立化された状態を変更したり、これに反する条約もまた受容できないというものであった<sup>16</sup>。まるでスイスやオーストリアのように、である。そしてこのために南北朝鮮当事者同士が会合し、統一の話し合いによる合意へと向かわせようという主張が、中立化平和統一論に含まれた当時の脈絡であった。

ここで張壹淳の「平和」に対する認識は一大転換を迎える。それまでは南北朝鮮分断の現実是非暴力による南北朝鮮の当事者同士の合意で成し遂げられることだと張壹淳は考えていた。しかし、南側だけでも言い争いは後を絶たず、あげくに自分は公安事犯に追われ獄中で苦しむ始末である。彼の認識が転換していることは、統一に関する言及の変化から明らかに見て取れる。

最近時折統一運動をしている人が訪ねてくる。だから私は、あんたらの統一運動は本当に北との統一を想定しているのか？ と聞いたらそうだという。そんなもんだからこう言ってやった。あんたら国民とも統一運動まともにできてないくせに、何が北との統一運動だ？ 南の内部だけでも地域感情でてんでバラバラ、理解関係も感情的にも溝

が深い。南でも統一できてなくせに何が統一運動だ。私には理解できないね。<sup>17</sup>

このような言説は田好根氏の言うように、統一に対する議論以前に南韓内部の地域葛藤や対立等を先に解決すべきと言っているようにも見える<sup>18</sup>。しかし、それは表面的な問題にすぎない。張壹淳は「民族共同体が皆共に生きる方法を見出さなければならない。それは詰まるところ我が民族の統一が我々だけの統一ではなく、全世界の統一の道に向かわなければならないのだと思う」という。そして彼は次のような言葉も残している。

我々が米国やソ連、そして彼らの欲望によってつくられたイデオロギーに拘わらず、南北が自ら往来し、我々の伝統、我々の元の生き方を固守していたら果たして分担という結果になりましたでしょうか？ なってないでしょうって話ですよ。今まで我々は我々の伝統、我々の生き方をあまりにも無視し過ぎてきました。しかし、これは特段我々韓国だけの問題ではなく、全世界が同じような始末であります。要するに、現状ではダメということです。現状を覆し、改める必要があります。<sup>19</sup>

以前まで張壹淳は民族共同体が生きて行く方法としての統一を目的とした平和を主張してきたというならば、今度は統一が目的ではなく共生を目標に据えて行った。そのため民族がたとえ統一されたとしてもそれが共生的な形でない限り、彼はその統一に意味を見出さなかつたろう。ともあれ彼は民族を超え、全世界に向けて共生の生き方へとパラダイム転換するよう主張する。民族から全世界人への思惟の拡張とも言えよう。そしてこのような彼の変化の起点は、おそらく三年間の牢獄生活と社会安全法・政治浄化法によって活動規制を受けた時期ではないかと思われる。特に三年間の牢獄生活の間、最愛の母を亡くしたこともあつただろう。さらに彼の妻李仁淑（イ インスク）氏が「生魚は水の流れに遡る（生魚逆水泳）と常に不条理に屈せまいとしてた人が、監獄から帰ってきたら変わった。水流れに沿って流れる術を覚えた」<sup>20</sup>と言っていることから、監獄経験は大きな起点になったことが窺える。

## 2. 自他共生の道：1964～1977年

張壹淳は平和に対する考えをさらに進展させ、生命に対する思想へと広げていく。より現実的で根本的な問題に注目するようになったのである。とある女性記者との対談で張壹淳は次のような言葉を残している。「宇宙のあらゆる形態が皆そうなっております。分けることはできない。分けて支配するようなものではない（中略）南北の分断もそうじゃないです

か。分断され、支配され、支配者側に媚びを売る連中がいる。少なくとも一つの生命単位として太陽と地球があり、その中に存在するあらゆるものが協同的に存在してはじめて生命が維持されるのです」<sup>21</sup>。このように、彼は共生の道を模索するようになる。

1965年、池學淳（ジ ハクスン）主教の原州教区赴任は張壹淳の人生にとって運命的であった。まず彼らは大衆に対する教育とカトリック運動を始めた<sup>22</sup>。李鎔浦（イ ヨンポ）氏が言うように、その当時彼らはカトリックと民衆・民族思想を結合させようと決心していたのである<sup>23</sup>。そして、彼らはその当時名だたる社会運動家の咸錫憲（ハム ソッコン）のような人物等を招待し、一般市民と信者達向けに定期的に教育を実施した<sup>24</sup>。張壹淳の思想から鑑みるに、このときは共生の方案を模索していた時期であったと思われる。ゆえに彼は、後に自らが「キリスト教信者」の限界を克服し、より民衆に寄り添うために池學淳と相談し、1969年10月教区附設の真光中学校に「協同教育研究所」を設立する<sup>25</sup>。教会の内部より外部で活動した方が皆が共に生きるといった趣旨により合っていたからだろう。その後、「明るい信用協同組合」をはじめに、農村と鉾山村に74の信用協同組合を設立、生活協同組合を推進し、広範囲の地域協同運動へと発展させて行った<sup>26</sup>。しかし、こういった運動は信用協同組合以外は全て失敗に終わる。金芝河（キム ジハ）は「出獄後1970年代の協同運動を評価した結果、信用協同組合運動以外は悉く失敗したという結論に至った」<sup>27</sup>とされており、根本的な理由は「理念的土台が微弱だった」<sup>28</sup>と述べている。

70年代の張壹淳の運動は「生命」を中心とした経済的・制度的側面に重点が置かれていた。孟子の「恒産なくして恒心なし」という言葉のように、張壹淳は恒産（基本所得）のための制度的装置を調えるために協同組合運動に没頭していたのである。無論、これも共生のための彼の生命思想の反映であった。そして、その生命思想の基盤は池學淳主教を筆頭とするカトリック運動が根幹であった。原州教区長であった池學淳主教は第二バチカン公議会にも参加し、宗教世界観のパラダイム転換に先駆けた人物であった。さらに、このような変わり行く世界観を基に社会参加にも積極的だった。当時原州教区の平信徒会長であった張壹淳は池學淳主教と互いに影響を与え合い、当時の労働運動と農民運動の先頭に立った。しかし、このような労働運動と農民運動だけでは限界があったことを、張壹淳自身も認識するようになる<sup>29</sup>。そして彼は次のような言葉を残している。

無論、人間が人間を搾取したり抑圧したりするのは須らく終息されなければなりません。しかし、今日は資本主義社会であるか共産主義社会であるかに拘わらず、産業社会が自然を略奪破壊して得られた賜を公平に分け合おうと叫び続けるだけでは事足りま

せん。いや、今日の核問題・公害問題・資源保存問題等、地球が死にかけて行くこの世界の問題は解決しきれないのです。<sup>30</sup>

### 3. 飯は天（ハヌル）である：1977年以降

1960～70年代の韓国は慢性的な食糧不足問題を解決するため国家的な努力を惜しまなかった。農家には「統一稲」といった品種の稲と共に、化学肥料と農薬を補給した。その結果「1965年にわずか350万トンしかなかった米の生産量は1977年600万トンまで増加し、1ha当たり生産量も4.94トンという、世界最高記録を塗り替えた」<sup>31</sup>。当時政府はこれを「緑色革命の成就」と闡明した<sup>32</sup>。しかし、光あるところにまた闇も生じる。当時1976年6月9日時の「傾向新聞」では次のような記事が書かれている。「我が国の農薬使用量を見ると65年に2,955トンであったのが70年には9,143トン、75年には2万559トンにまで及び、10年間約7倍も増加しており、このうち毒性の強い殺虫剤だけでも65年390トンであったのが75年には5,042トンと、約12倍も増えた」<sup>33</sup>、米の生産量増大の裏には農薬があり、「農薬中毒」という人災があったのである。農薬の影響で至る所の農民達は倒れて行った。これを皮切りに張壹淳先生をはじめ「原州キャンプ」と呼ばれていた社会運動家達は民主化運動から生命運動へと一大転換していった。これが1977年のことである。張壹淳は1991年3月21日時事週刊誌「時事ジャーナル」のユウンヨン記者との対談で次のように語っている。

ハンサリム運動は数十年間構想してきたものでして、もう一つは70年代消費者協同組合運動を行うなかで、また反独裁運動を続けているうちに終戦のマルクス式パラダイムから脱しなければならなかったんです。それだけでは問題の解決はおろか、悪循環の繰り返しになってしまう。農薬・肥料を撒き散らし都市産業化を図るやり方では、この郷土全体が荒れ果ててしまいそうでした。環境も活（生）き、我々も活（生）きようとする方向へと進まねばなりません。6.3事態以降に原州で農村運動を起そうと言った朴オー（パク ジェイル）氏と77年から「生きていく上で、共同体又は農地田畑を活（生）かし、食を活（生）かす方向へと進まねばならない」と話しました。<sup>34</sup>（太字は引用者。以下同じ）

同年、丁玄鏡（ジョン ヒョンギョン）梨花女子大学キリスト教学科教授との対談においても張壹淳は1977年を協同と共生の時代への転換の起点であると言っている<sup>35</sup>。また、

1992年6月11日MBCテレビ番組「現場インタビュー、この人」で張壹淳は次のように答えている。

私は実は77年から決定的に変わらなければならないと思っていたんだ。大地が死を迎え、生産業の農民は農薬中毒で次々と倒れていく。これは根本から見直さなければならないんだ。産業社会において利潤を公平分配云々といった、そんなレベルの話では到底解決できない。だから私は方向を変えなければならないと、人間だけの共生だけでなく自然との共生をも考えなきゃならない時代になったんだと、そう思ったから、これからは進むべき方向を変えなきゃならないと考えたんだ。

1977年の張壹淳の告白は結局、彼の生命思想のもう一つの転換点だった。共生のための彼の思考は主に経済的・社会的な側面に焦点が合わされていたが、根本的な限界があるということに自覚するようになる。それはまさに世界観の問題だった。このことについて、元ハンサリム名誉会長だった朴オー（パク ジェイル）は次のように回想している。

初期には既存の農民運動的な観点に基づいて農民の社会的権益回復を目指し抑圧構造の打破に留まっていましたが、張壹淳先生と持続的に関わっていくなかで、社会や物事の中にある相生の関係をまず基礎として見るようになり、今までとは違った世界を捉えるようになったのです。……物質主義的な産業文明の根本的な転換が無い限り人類の健康な未来は実現できないと思われませんが、先生は現代産業文明の問題と限界を克服し得る代案的な文明創出が必要であるとされて、生命運動を目指されたのだと思われれます。<sup>36</sup>

このような転換点の核心は、生命に対するより根本的な認識への拡張であった。そして以前まで協働・共生という価値観は人間と人間の関係、すなわち人間の範囲を超えるものではなかった。しかし、上記の転換点以降は自然と宇宙へと視野が広がり、遍く宇宙が共生する道を模索するようになるのである。張壹淳はこれを裏付けるために東学という韓国の伝統思想に辿り着いたようである。

我々は崔水雲（済愚）先生、崔海月（時亨）先生の中に生き方の模範を見出しています。特に三十八年間崔水雲先生の意を尊重し活動されましたが、常に行き先ではあらゆる人々の生活と仕事を助け、お言葉を伝えられた姿は、永劫の模範であります。<sup>37</sup>

今日においても崔時亨先生のお言葉、例えば「天地萬物」に「莫非侍天主也」（天地萬物に天主を侍らざること莫れ）と、ハヌルニム（天主）を、生命の本質を、本体を侍て



いないのは一つも無いと。<sup>38</sup>

張壹淳は東学を立てた水雲・崔濟愚と海月・崔時亨の人生を生き方の模範とすることで、彼らの言うような、世界のあらゆる存在をハヌルニム（天主）を侍るが如く扱うべきという理論を借用する。そしてこのような生命思想が「仏家でいうところの草一本、石一つも仏という話や、聖書でいう一体の存在には父なる神が共におられるという話」と違わないものという。人間を中心に置く既存の視方から、広闊な大地を超え宇宙的次元へ視野を広め認識しなければならないという。これを彼は全一性と称した。「今日どれほど多くの専門家を集めたとしても、全一性を損ねてしまえばそれは結局知識のモザイクにしかならなくなってしまふのです。いわば生態を死の無機態にしてしまうことなのです」<sup>39</sup>。

張壹淳は生態主義的思考への転換について次のように言っている。「我々は今後、自然とも共生するということを考えなければならない。草一本、石一つ、虫一匹でも粗末に扱ってはならず、徒に殺生してはならない。あらゆるものを敬い、愛し、いたわり、丁重に扱わなければならない」<sup>40</sup>と。延いては「めし一杯を知ればこの世の全てを知ることができる」<sup>41</sup>という海月・崔時亨の話を伝えながら、米一粒もハヌル（天）であり、我々もハヌル（天）であるゆえに、飯を食うというのはハヌル（天）がハヌル（天）を食すという「以天食天」の法説を説く<sup>42</sup>。そしてこのような内容は余すところなくハンサリム宣言へと受け継がれていく。

張壹淳の生命思想の核心は生命に対する認識の拡張であった。南北統一に対する彼の認識の変化でも見られたように、彼は次第に生命に対する認識を拡張してきた。民族統一の認識を超え全世界の平和への認識へ拡張し、人間と人間の関係のなかで協働・共生する認識を超え人間と自然、延いては宇宙萬物の一つであるという霊性の次元へと認識を拡張する。緑色評論の編集者キムジョンチョルとの対談で張壹淳は次のように語っている。

生命というものは見えもしなければ臭いを嗅ぐこともできないが、確かにあるんだ。そのおかげで万物は生きていけるんだから。儒教が中国で失敗したのはなぜだろうか。それは霊性が欠けていたからである。孔子は目に見えないものに関しては認めなかった。仏教が入って来てやっと霊性を取り入れた。しかし今の時代、何事も目に見えるもの、消耗されるものばかり勘定に入れてるからこんな世の中になってしまったんだ。我々が目指す生命運動の肝は全一性だが、全というものは目に見えないものだ。<sup>43</sup>

「飯はハヌル（天）である」「食卓を活かすのは延いては生命を活かすことになる」単純であるが奥の深い、我々の偉大なる遺産が「ハンサリム」に受け継がれている。「一であり

大(ハナ)」「全」「共」という意味での「ハン(한)」に、「活かす」「生きる」という意味での「サリム(살림)」が合わさった「ハンサリム(한살림)」には、あらゆる生命を共に活かし、生命の価値観と世界観をもって全生命が一家屋根の下で暮らせるような、共に生きるという意味が込められている<sup>44</sup>。

#### 4. 日常の靈化

生命に対する張壹淳の認識は確かに全宇宙に届いている。それは「天地はすなわち父母であり、父母はすなわち天地であるので、天地と父母は一体である(天地即父母、父母即天地、天地父母一體也)」<sup>45</sup> という言葉にあらわされている<sup>46</sup>。これは張壹淳において「ハヌル(天)」「ハナニム(父なる神)」「仏(釈迦)」「道」として表現される。だからといって「我こそが天」などという主張にはならない。世界は「我」の延長ではないというのである。だから自身を中心とし、その他自身を巡るものとしての環境や生態論は張壹淳の考え方には合わない。彼は「我(自分)」のことについて次のように語っている。

真なる「自分」「我」とは何か。それを問い詰めるとき、真なる「我」というものは見えてこない。「我」という「我」があるのではなく、「大我」の「我」しか存在しないのだ。自他が無いのである。教会に通う人は父なる神、寺に通う人は仏様というように、それは宗教ごとにある。そしてそれは目に見えるものではない。触れられるものでもない。ただ、それに感謝しなきゃいけない。神も仏も、草の一本、石一つ、どこにでもいらっしゃる。何かするときにも常に共である。我々も朝起きたら天と地と萬物にありがとうと思うような、礼拝をしなければならないのです。<sup>47</sup>

張壹淳にとって「我」という存在は、固定された実体があるような本質として存在するものではない。彼にとって「我」とは連帯関係や有機的な関係の中に真なる「我」があらわれるものと認識されている。それがすなわちハヌル(天)であり、ハナニム(父なる神)、仏(釈迦)、道と称されているのである。ここには前提がある。真なる我というのは全宇宙を指すものでもあるが、全宇宙、すなわち大我を構成している我もまたそれに違わないということである。これを趙晟桓は「生命の公共性に基づいた宇宙的自我」<sup>48</sup>であるという。宇宙的自我を語る張壹淳は本来の姿に還らなければならないという。「我が国の甌山教の姜一淳(ガン イルスン)先生は原始反本を唱え、原初へ還ろう」<sup>49</sup>といい、我々の日常生活から失われし「靈」へ還るべきというのである<sup>50</sup>。その「靈」とはすなわち生命のことである

51. 宇宙的自我としての生命性を日常生活で具現すべきだという。

自分の毎日の生活のなか、欲を無くし謙虚に誰もが侍て敬える姿勢で暮らすとき、それはすなわち仏家でいう「無念工夫 相続不断」なり。あれこれと徒に考えるのではなく、欲を御する訓練をする。そうやって日常生活をしていくなかで、ハンサリムの志すところが皆の中に宿るのではないか。

張壹淳の生命思想は人間と人間を超え、人間と自然、延いては宇宙と一つであるという共生を語っている。ゆえに彼の自我観は宇宙的自我まで拡張されていると言える。彼はこのような世界観を認識してから、日常生活におけるあらゆる物事はひとつの霊であり、ひとつの生命として見做すべきだとした。これが彼がよく使う「無為」であり、「侍(モシム)」であり、「三敬(敬天、敬人、敬物)」が含む意味である。彼は生活のなかでの「正念修練とマインドフルネス」<sup>52</sup>の修養論まで唱えていたのである。

「一杯の飯に全宇宙(天地人)が含まれている(一碗之食 含天地人)」という意味で始まったハンサリム運動は、最も日常的な人の生活のなかで行われる修養であり運動であった。それは結局生命に対する新たな認識転換の目的であり、志す方向であった。しかし張壹淳は「碾臼回してた子牛は畑でも耕せず回るだけだ」<sup>53</sup>という韓国のことわざを挙げ、古い習慣や慣行は中々離せるものではないと指摘する。絶えない自己統制と修養を強調するのである。このように張壹淳の思想は日常からの革命であり、いわば「日常の靈化」だということができる。

日常の靈化は農薬中毒による農民と大地の死から触発された、人間中心の西洋近代化に対する全面的な反省から始まった。西洋の近代化の代表的な成果は自然科学の発展である。自然科学は因果的メカニズムから自然を人間の目的のための一手段として利用してきた。つまり、人間は自然を征服すべき対象と見做して来た。張壹淳は、西洋の近代的な思考のもとでは人間と自然の地位は存在論的に常に上下関係にしかなり得ないと見た。そのような世界は結局、競争と効率を重視し、最後には殺しの世界へと至ってしまうと。その主たる例が即ち、農薬中毒による人と大地の死であった。このような人災について張壹淳は根本的な問題を提起したのである。「今日の科学というものは全て、分析したり、割ってみたり、比較してみたりしていますが、本当は全体をまるごと見なければならぬのです。米一粒も宇宙の一つのもとなんです。それが無ければ何も生まれてこないのです。虫けら一匹も、この地と天と空気と、あらゆる条件が備わらなければ存在し得ないのです」<sup>54</sup>。このような悩みが結局全一的世界観を生み、これを生活のなかで実現させることが日常の靈化であると

言えるだろう。こういった点から張壹淳の生命思想は非西欧的であり、東学を根幹とする土着的思想であり、靈性を中心とする思想である。だからといって張壹淳が近代科学を捨て原始社会へ戻ろうとしたのではない。人間中心の物質科学ではなく、生命の科学へと向かわなければならぬのだということである<sup>55</sup>。

### Ⅲ. 終わりに

金芝河（キム ジハ）は張壹淳に対する追悼の文で彼の思想をまとめるならば「生命と平和」であると言い<sup>56</sup>、李泳禧（リ ヨンヒ）もまた張壹淳の思想を「生命」中心であるとみていた。本章で見てきたように、彼はずっと生命の重要性を強調してきた。歪んだ韓国現代史の傷を身をもって経験したからこそ、誰よりも生命の重要性を強調したのであろう。生命に対する彼の認識は初期には民族に限ったもので民族の平和統一を唱えていたが、その範囲は次第に全世界の平和へと拡張していった。1965年彼が出獄して以来、当時の時代状況の影響下で皆共に良く生きようという協働組合運動次元の生命運動が展開された。これは人間と人間の関係のなかで共生を模索した時期だった。以後1977年は彼の思想の一大転換期である。彼は農薬中毒で倒れて行った農民と大地の死を通じ、人間と人間との関係を超越人間と自然との関係へと、延いては宇宙との関係の共生を模索するようになる。

その背景には西欧型近代化に対する根本的な問題意識があった。人間中心主義を超え宇宙萬物が一つであり全であるという全一的世界観を中心に据えていた。ここには東学を中心とする土着的思想が基盤となり、靈性的世界観を構築していった。張壹淳の生命思想は民主平和統一からはじまり、日常の靈化に至る。張壹淳は草の一本にも宇宙的生命が宿っていると考え、全一的世界観を基盤に日常からの革命を強調した。そのためハンサリム運動は日常生活での食卓活かし（サリム）を通じて農業を活かし、延いては生命を活かすという生活運動として具現された。この論文では張壹淳の伝記に基づいての生命思想の路程に焦点を合わせたため、ハンサリム運動の求心点だった原州社会運動家達の集団である原州キャンプの一員達と張壹淳との違いについては、今後の研究課題であることを指摘しておこう。

### Ⅳ. 参考文献

- ・『傾向新聞』2015年04月11日付、光復70年歴史ルポ

- ・ガン ジョンイル「韓半島と平和統一と中立化」『韓国議会学会報』創刊号、2012年
- ・ガン チャンソン「韓国の生命運動と代案政治運動—无爲堂 張壹淳を中心に—」高麗大学校大学院博士学位論文、2015年
- ・キム ソンミ『ハンサリム 大農夫 仁農 朴オー (パク ジェイル) 評伝』図書出版ハンサリム、2017年
- ・キム ソナム「1970～80年代原州グループの生命運動研究」『東方学誌』178号、2017年
- ・キム ソナム『協同組合と生命運動の歴史』ソミョン出版 (소명출판)、2017年
- ・キム イクロク『我は終ぞ知らざりき、汝が我なりけり』シゴル生活 (시골생활)、2010年
- ・无爲堂サラムドゥル (무위당사람들)「无爲堂の文」『原州で世界の共同体精神を顧みる』(社)无爲堂サラムドゥル (무위당사람들)、2015年
- ・イ ヨンポ『生命思想の大師匠、无爲堂 張壹淳』小さき種 (작은 씨앗)、2011年
- ・張壹淳『米一粒の中の宇宙 无爲堂 張壹淳の話集』緑色評論社、2009年
- ・ジョン ホグン「張壹淳の平和思想—韓国伝統仏教との関連性を中心に—」『統一と平和』8集2号、2016年
- ・趙晟桓「无爲堂の生命思想で繋がる原州東学—崔時亨の『天地父母思想』と原州キャンプの『ハンサリム思想』を中心に—」、2018年東学農民革命原州秋季学術大会<東学のグローカリゼーション：東学農民革命と江原道原州>学術大会発表論文、2018年11月2日
- ・趙晟桓『韓国近代の誕生—開化から開闢へ—』図書出版、モシヌンサラムドゥル (모시는 사람들)、2018年
- ・チェ ソンヒョン『粟一粒 張壹淳』兜率、2004年

## 注

- 1 この論文は2018年6月20日原州ハンサリム三十三周年「張壹淳 (ジャン イルスン) 生命思想とハンサリム運動」で発表した文章を修正したものである。
- 2 ガン チャンソン「韓国の生命運動と代案政治運動—无爲堂 張壹淳を中心に—」高麗大学校大学院博士学位論文、2015、53頁。
- 3 田好根 (ジョン ホグン) 「張壹淳の平和思想」『統一と平和』8集2号、2016年。
- 4 趙晟桓 (ジョ ソンファン) 「无爲堂の生命思想で繋がる原州東学—崔時亨の『天地父母思想』と原州キャンプの『ハンサリム思想』を中心に」、2018年東学農民革命原州秋季学術大会<東学のグローカリゼーション：東学農民革命と江原道原州>学術大会発表論文、2018年11月2日、参照。
- 5 趙晟桓「市民社会の東学」『韓国近代の誕生—開化から開闢へ—』図書出版、モシヌンサラムドゥル (모시는 사람들)、2018年、63～84頁。

- 6 キム ソナム「1970～80年代原州グループの生命運動研究」『東方学誌』178号、2017年、キム ソナム『協同組合と生命運動の歴史』ソミョン出版（소명출판）、2017年。
- 7 チェ ソンヒョン『粟一粒 張壹淳』兜率、2004年、26～27頁
- 8 『東亜日報』1961年11月29日付。当時の新聞記事を見ると、警察では十二年の刑を科し、裁判では最終的に八年の刑が宣告された。しかし三年服役後出所した。（イ ヨンポ、『生命思想の大師匠 无爲堂 張壹淳』、91頁）。
- 9 『傾向新聞』2015年4月11日付、光復70年歴史ルポ。
- 10 Ibid.
- 11 Ibid. 2012年6月6日には四月革命の熱望を集めた平和統一運動、民族自主統一中央協議会の行為は歴史的に復権した。
- 12 チェ ソンヒョン『粟一粒 張壹淳』兜率、2004年、169頁。
- 13 イ ヨンポ『生命思想の大師匠 无爲堂 張壹淳』小さき種（작은 씨앗）、2011年、83頁。
- 14 キム イクロク『我は終ぞ知らざりき、汝が我なりけり』シゴル生活（시골생활）、2010年、171頁。
- 15 キム イクロク、同書、170頁。
- 16 ガン ジョンイル「韓半島と平和統一と中立化」、『韓国議会学会報』創刊号、2012年、35頁。
- 17 无爲堂サラムドゥル（무위당사람들）「无爲堂の文」『原州で世界の共同体精神を顧みる』（社）无爲堂サラムドゥル（무위당사람들）、2015年、17頁。
- 18 田好根「張壹淳の平和思想—韓国伝統仏教との関連性を中心に—」『統一と平和』8集2号、2016年、101頁。
- 19 田好根 102頁再引用（1988年9月19日ハンサリム月例講座、チェ ヒスン「无爲堂 張壹淳の書画世界」、チェ ヒスン他『原州のたましい（オル、일）』第18号、289～290頁）
- 20 チェ ソンヒョン『粟一粒張壹淳』兜率、2004、28頁。
- 21 張壹淳「同胞の可能性は大衆の中に」張壹淳『米一粒の中の宇宙 无爲堂 張壹淳の話集』綠色評論社、2009年、159頁。
- 22 李鎔浦（イ ヨンポ）、前掲書、101頁。
- 23 李鎔浦（イ ヨンポ）、前掲書、同頁。
- 24 前掲書、同頁。
- 25 前掲書、同頁。
- 26 前掲書、同頁。
- 27 張壹淳『米一粒の中の宇宙 无爲堂 張壹淳の話集』綠色評論社、2009年、133頁。
- 28 前掲書、同頁。
- 29 前掲書、163頁。
- 30 前掲書、133頁。
- 31 行政安全部 国家記録院 今月の記録資料、「統一稲開発により食料自給自足の契機用意、2010年11月。<http://m.archives.go.kr/next/m/monthly/detail.do?designateYear=2010&designateMonth=11>
- 32 同リンク。
- 33 キム ソンミ『ハンサリム 大農夫 仁農 朴才一（パク ジェイル） 評伝』図書出版ハンサリム、2017年、150～151頁、再引用。
- 34 張壹淳「同胞の可能性は大衆の中に（対談者ヨ ウンヨン）」、『米一粒の中の宇宙』綠色評論社、2009年、155頁。
- 35 前掲書、162～163頁。

- 36 无爲堂を偲ぶ会『汝に出会い、恥じらいを知った』緑色評論社、2004年、175～176頁。
- 37 張壹淳『米一粒の中の宇宙 无爲堂 張壹淳の話集』緑色評論社、2009年、192頁。
- 38 前掲書、同頁。
- 39 キム イクロク『我は終ぞ知らざりき、汝が我なりけり』シゴル生活 (시골생활)、2010年、181頁。
- 40 李鎔浦 (이 옹포)、前掲書、177頁。
- 41 前掲書、179頁。
- 42 モシム (侍) とサリム (活) 研究所、109頁。
- 43 張壹淳『米一粒の中の宇宙 无爲堂 張壹淳の話集』緑色評論社、2009年、209頁。
- 44 ハンサリム『ハンサリム 10年を顧みて』、1996年。
- 45 『海月神師法説』、「天地父母」の一節で、原州市好楮面にある海月 崔時亨の記念碑に記されている文でもある。
- 46 趙晟桓「无爲堂の生命思想で繋がる原州東学—崔時亨の『天地父母思想』と原州キャンパスの『ハンサリム思想』を中心に—」、2018年東学農民革命原州秋季学術大会<東学のグローカリゼーション：東学農民革命と江原道原州>学術大会発表論文、2018年11月2日。
- 47 張壹淳「聖なる食卓」『米一粒の中の宇宙 无爲堂 張壹淳の話集』緑色評論社、2009年、51頁。
- 48 趙晟桓『韓国近代の誕生』図書出版モシヌンサラムドゥル、2018年、78頁。
- 49 張壹淳「和合の論理、協同する生き方」、『米一粒の中の宇宙：无爲堂 張壹淳の話集』緑色評論社、2009年、41頁。
- 50 前掲書、同頁。
- 51 前掲書、62頁。
- 52 前掲書、84頁。
- 53 前掲書、73頁。
- 54 前掲書、67頁。
- 55 前掲書、105頁。
- 56 チェ ソンヒョン『粟一粒 逸話で見る張壹淳の文と画』兜率、2004、10頁。